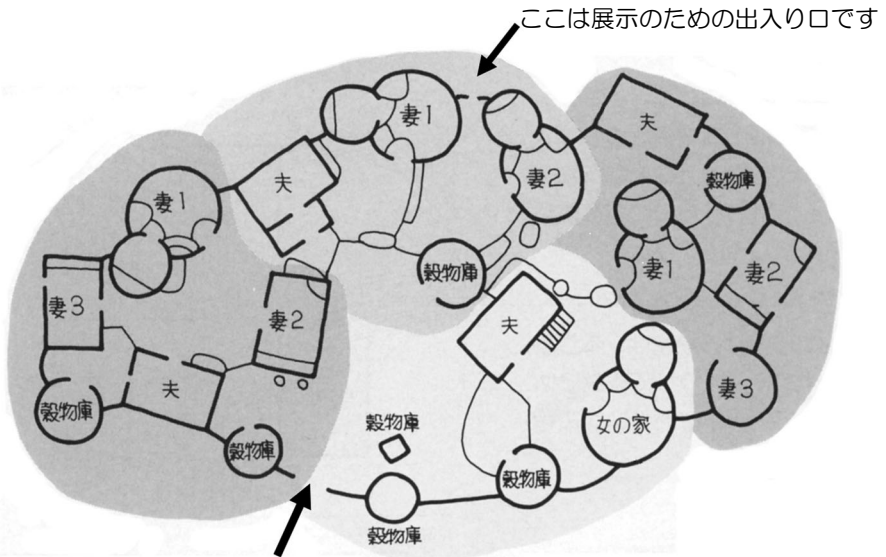


## 西アフリカ カッセーナの家

西アフリカの国ブルキナファソのカッセーナの人びとは、サハラ砂漠の南に広がるサバンナ地帯で、モロコシやトウジンビエ等の雑穀を栽培する焼畑農耕民です。一夫多妻制度のもと、同じ屋敷地に血縁関係にある男たちとその複数の妻と子供たちが暮らします。四角い家には男性、ヒョウタン型や丸型の家には（四角い家にも）女性や子供が住みます。壁の幾何学模様を描くのは女性の仕事で、女性たちが好みで模様を決めて描きます。



こちらが本来の出入り口です。

本来の出入り口は西か南で、東は悪い力の来る方向とされる。

複数の複婚(一夫多妻制)家族が集住  
4人の男とその9人の妻の4世帯

### 【砦のような屋敷】

建物を土塀でつないで囲んでいるのが特徴です。この地域はかつて近隣の民族間の争いが激しく、敵の侵入を妨げるために、家屋をつなぎ、屋敷全体を砦のようにしました。平らな屋根は農作物の干し場であるとともに、敵を見張り迎え撃つ所でもありました。

## カッセーナ人の“ヒョウタン文化”

### 【ヒョウタンの使い道はたくさん】

ヒョウタンはアフリカ起源<sup>きげん</sup>の植物と考えられています。カッセーナ人が住む西アフリカのサバンナ地帯では、野生のもの<sup>さいばい</sup>、栽培されたものなど、形も大きさも色々なものがあります。ヒョウタンは軽く、液体や細かい粉を入れることができ、殻<sup>から</sup>が固く空気を通さないという性質<sup>せいしつ</sup>があります。人々はこの性質<sup>さいだいげん</sup>を最大限に利用してさまざまな使い方をしてしています。飲み物、食べ物を入れる食器、おたまやひしゃく、ボウル等の調理器具<sup>ちようりきぐ</sup>として、収穫<sup>しゆかく</sup>した穀物<sup>こくぶつ</sup>を選り分ける道具、大きなものは洗濯<sup>せんたく</sup>たらいや赤ん坊<sup>あかひら</sup>の行水<sup>ぎようすい</sup>用に、小さなものは小物入れや畑仕事用の種入れ容器に、他には太鼓<sup>どう</sup>の胴<sup>もつ</sup>や木琴<sup>もくしん</sup>の共鳴器<sup>きやうめいき</sup>などにも利用されます。

### 【女性とヒョウタン】

カッセーナの主婦は、ザノと呼ばれるヒョウタンのモニュメントを持っています（右図 参照）。油できれいに磨き上げられた球形または半球形のヒョウタンをいくつも重ねた物を自分の家の中央に吊るして飾ります。いちばん底のヒョウタンの器には、カリテ・バター（アカテツ科<sup>あかてつ</sup>の野生樹<sup>やせいじゆ</sup>の実から取る油脂<sup>ゆし</sup>、英語ではシア・バター）が入っています。カリテ・バターは調理<sup>なんこう</sup>、軟膏<sup>せつげん</sup>、石鹸、美容クリームなどに使います。使い続けていくうちにひびが入ってしまったヒョウタンを縫い合わせるのは女性の役割です。少し割れてしまったくらいで捨てることはなく、大事に直して使います。女性の生活とヒョウタンは深く関わり合っているのです。

### 【サバンナのエコな暮らし】

ヒョウタンは道具に加工しやすいように生育途中で人の手が加えられます。収穫した後に形や大きさに合わせて加工され、修理をしながら大事に使い切った後、ヒョウタンはサバンナの土<sup>かえ</sup>に還っていきます。このようにヒョウタン製の道具はとてもエコであるとも言えます。サバンナに住む人々は、自然の素材<sup>さいだいげん</sup>を最大限に活用して暮らしているのです。

